

チュニジア南東部におけるオリーブの意味 —どのようにオリーブはバラカの木とみなされるのか—

平成 21 年入学

参加したフィールドスクール：ナミビアフィールドスクール

調査地（調査国）：チュニジア

二ツ山 達朗

キーワード：バラカ、崇敬、生業、在来知、乾燥地域

自分の研究テーマについて

神の恩寵や恩恵という意味をあらわすバラカは、イスラームを理解する上でも重要な概念の一つである。神のバラカを人々に具現化する者が、イスラーム世界の聖者であるとも言える。聖者研究はこれまでも活発になされてきた議論であり、そのなかでも聖者がどのようにバラカを伝達し、神と人々の間を介在する存在として認識されているかという問題は、中心的議論の一つであった。

一方でバラカが具現化されるのは聖者だけではない。チュニジア南東部ではオリーブという存在もまた人々にバラカをもたらす存在として捉えられている。報告者は調査対象地域で、オリーブという存在がなぜバラカをもたらすものとして認識されているのか調査をすることで、聖者以外にも神と人との間を介在するモノの存在を示し、民衆のイスラーム理解における新しい視座を提示することを目的としている。

対象地域はサハラ沙漠北辺の年間降水量 100～200mmの乾燥地域であり、自然植生では木々が育つ事は難しい。しかし紀元前から続く地域住民の在来知がオリーブの栽培を可能としており、住民もオリーブを生業とすることでその乾燥地域で暮らしをたててきた。その意味でオリーブと人間は長い歴史のなかで共生関係にあるとも言える。そのような共生関係のなかで、彼らがどのようにオリーブを生命の源や生活のシンボルとして語り、バラカが具現化されるモノであるにとらえているのかを調査する。



【写真：オリーブの木の手入れをする親子。チュニジア、シェニニ村にて】

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールの有意義な点は、様々な分野の先生方からフィールドの情報や調査方法を学ぶことにより、研究領域を横断した多角的な知見を得られる点にある。ナミビア・フィールドスクールにおいても、UNESCO 職員による開発の講義、小学校・高校の視察、乾燥地域での植生の調査、Topnaar の村での人類学的な調査、ナミビアの歴史についての講義などがあり、開発・教育・自然地理・歴史・人類学などその学問領域を振り返っても多岐に及ぶ。同一地域でも、学問的切り口により得られる地域像とその解釈は全く異なることが理解できた。

また、それらは密接に関連しあっている。例えば今回の調査地である Gobabeb は、ナミブ沙漠の気候と年に数回流水する Kuiseb 川が地域特有の自然地理をつくりあげている。人類学的に見れば同一地域に !Nara フルーツを生業とした Topnaar の人々が住んでおり、その生業は上述の自然地理に大きく左右される。開発という視点からすれば、1961 年にできたダムにより Topnaar の人々の生活は著しく変化している。このように、それぞれの学問的視点から得られた知見は、密接に関連しあっている。それが地域研究に学際的な視点が必要な所以であろう。そして、実際にそのような多角的な調査をすることができるのが、この大学のフィールドスクールの特徴といえる。地域研究や、実務家として一定の地域を調査することに携わるのであれば、これらの学際的な理解がいかにより必要であるのか、身をもって学ぶことができた。



【写真: !Nara フルーツを家畜に与える Topnaar の人, ナミビア AnamStrat 村にて】

フィールドスクールで学んだことが、どのように研究テーマにいかせるか？

自身の調査対象地域もナミビア・フィールドスクールでの調査地も、共に植生が希少な乾燥地域であるため、大変参考になった。以下3点に分けてその意義を述べる。

1点目は、植物同定の方法から、データの記載方法など、植生の調査方法を学べたことである。自身の研究では人類学的手法で参与観察を行っているが、オリーブという研究対象であるため、植生に関わる調査方法を学べたことは、自身の研究に大いに役立つ。

2点目は、乾燥地域に住む人々にとって、植生の変化が与えるインパクトの強さを学べたことである。希少な植生に頼って生活をしている Topnaar の人々が、上述したような Kuiseb 川のダムの建設という環境の変化にいかにより影響を受けているかを学んだ。このことは乾燥地域である自身のフィールドを鑑みても、植生とその変化が住民に与える影響を考察すべきであるという視点を持つ契機になった。

3点目は、Topnaar の人々へのインタビュー調査により、彼らの !Nara に対する気持ちを学べたことである。自身のフィールドでも、オリーブがバラカ概念と密接に結びつき、他のもの以上に心的な意味合いが強いモノである事は前述した。同様に !Nara フルーツなしには生活が成り立たない Topnaar の人々にとって、!Nara フルーツはどのような意味をもつモノであるのか、フィールドスクールでの最大の研究疑問だった。このようなことを Topnaar の村でインタビュー調査ができたことは、自身の研究においても大いに参考になる。



【写真: 収穫した !Nara フルーツを割る Topnaar の人, ナミビア AnamStrat 村にて】